

小学校算数科のテストに見いだされる日本語文型についての一考察

寺尾 裕子 (兵庫教育大学)

近年, 学校教育の現場でも日本語指導の必要な児童生徒が存在することが知られている。この論文の目的は, 小学校の算数科のテストの設問に表れる表現を日本語教育で用いられる「文型」という視点で分類, 分析し小学校での日本語指導の問題を考えることである。第1学年から第6学年までのテスト計126枚に表れた日本語の表現を対象に調査を行った。その結果, 日本語指導として取り上げるべき, 51の文型をリストアップできた。そのうち, 低学年で初出のものが「30」である。外国人児童がどの学年に配属されても, これらの文型をまず指導する必要があること, テストの設問特有の文型のあることも分かったので, それらを教授する必要があることなどが結論として, 提案される。

キーワード: 学校教育, 日本語指導, 算数科, 文型

寺尾裕子: 兵庫教育大学・学校教育研究センター・助教授, 〒673-1421 兵庫県加東郡社町山国2007-109

E-mail: uko@ceser.hyogo-u.ac.jp

A Study on the Sentence Patterns found in Mathematical Tests of Elementary Schools

Yuko Terao (*Hyogo University of Teacher Education*)

The purpose of this paper is to examine what kind of sentence patterns are used in mathematical tests of elementary schools and to show how Japanese should be taught in order that elementary school children from overseas can attend usual classes and understand each lesson. In order to fulfill this purpose, 126 sheets of mathematical tests are examined. As a result, 51 sentence patterns, which are thought to be useful for learning Japanese language, were selected. Among them, 30 sentence patterns are first found in the first and second year. The research shows that there are some specific sentence patterns used in tests. Those are recommended to be taught to foreign elementary school children by teachers whose task is to teach Japanese as a second language.

Key Words: Elementary school children, mathematical test, sentence pattern, JSL

Yuko Terao is an Associate Professor of Center for School Education Research at Hyogo University of Teacher Education, 2007-109 Yashiro, Kato-gun, Hyogo 673-1421 Japan. E-mail: uko@ceser.hyogo-u.ac.jp

はじめに

学校教育の枠組みの中でも、日本語指導の必要な児童・生徒が存在することが知られるようになり、日本語指導自体にも関心が寄せられ、研究もなされてきている。学校教育での外国人児童に対する日本語指導では、初期指導におけるコミュニケーション能力獲得のための指導のみならず、教科学習につながる日本語指導が必要である。小学校では、日本語で授業が行われ、算数科においても日本語でのテストにより評価がなされるのが普通である。しかし、授業で使われる日本語の文型・語彙が外国人児童にとって理解できないものなら、また、テストで用いられる日本語自体が理解できないために、彼らが問題を解くことができないとしたら、外国人児童の教育を受ける権利が保障されていないと言える。学校教育の枠組みの中での日本語指導のあり方について、教科学習に必要な日本語という視点から分析を試みることは意味のあることと考える。

1. 先行研究について

岩沢正子他(1994)は、教科理解のためには、教科学習の理解を助ける日本語教育が必要であるとの前提により、初級日本語文型と教科(算数)学習との橋渡しを試みている。1年生用の算数の教科書1種類を対象に、文及び語彙の調査が行われている。その結果、名詞の異なり語数は147語で、出現頻度の高い語に算数の用語が多いことが指摘されている。(p.77) 文末表現については、「Vます」を1位として、以下、「Vましょう」、「疑問詞/V/A(い形容詞)でしょうか」、「Nです」、「A(い形容詞)です」の順で多いことが指摘された。(p.78)

(注1)

池上摩希子(1998)は、算数科で使用される日本語を学ぶ目的のために作成された『文型算数』を用いた、中国帰国者定着促進センターでの実践例を報告している。その教材は小学校4年生程度までの加減乗除の内容を扱っているとのことである。(p.120)

矢崎満夫(1998)は、教科学習項目として算数文章題を取り上げ、読めない漢字やわからない語を含んだ文章題に対した時、外国人児童がどのようなストラテジーを用いて対処するかをテスト及び事後のインタビューによって調査した。(p.84) 矢崎(同上)は「文章題をパターン化し、文の述部に着目しながらわかることばだけをつなぎ合わせ、大意をつかむ練習」、「教科学習のキーワードとなる言葉の学習」を提案している。

岩沢(同上)は、調査対象が1年生用の算数の教科書

1種類である。池上(同上)では、教科指導に結びつくことが期待できる教材の存在が明らかになった。しかし、扱う内容が、「加減乗除」と限定されたものである。矢崎(同上)は、算数文章題を取り扱ってはいるが、研究内容は学習者の学習ストラテジーである。

2. 本稿の目的と研究方法

寺尾(1999)は、国語科のテストの設問に表れる日本語の文型を分析することにより、小学校における日本語指導の問題点について論じた。そこで明らかになったことは、第1学年、第2学年という、小学校の低学年において、テストの問題を理解するためには、多くの文型の理解が必要であるということであった。そのため、従来からある積み上げ式のシラバスで作成された成人向けの教材をまねたシラバス項目及びシラバス項目の提出順序によって日本語指導を行うことでは、教科学習に必要な日本語能力を児童につけさせることができないことも分かった。それを受けて、本稿では、算数科のテストで用いられる設問文を日本語教育で用いられる「文型」として抽出したうえで分析することにより、児童の算数学習と日本語指導の関わりにとって、何が必要かを明らかにする。国語科のテストとの違いがあるかどうかも見ている。本稿は、前述の先行研究とは視点の異なるものである。なお、使用した算数科のテストは、青葉出版(1998)の啓林館準拠のものである。第1学年から第6学年まで計126枚のテスト用紙を対象としている。

3. 算数のテストに見いだされる日本語の表現について

3.1 第1学年で初出の文型

本稿で用いる「V」は、日本語教育における通例として、活用形の如何に関わらず動詞をさす。いわゆる連用形、終止形、連体形の場合があるが特に記号として区別することなしに用いている。「N」は名詞を、「A」は形容詞を意味する。形容詞の場合も、活用形の如何に関わらず、「A」で表している。

- (1) 設問文の文末に「Vましょう」が用いられる文型
「たしごんをしましょう」、「ひきごんをしましょう」、「かずをかきましょう」という表現が使用されていることが、特徴的である。第2学年以降なら、「たしごんをきなさい」、「ひきごんをきなさい」などと、「* *なさい」と表現するものである。
- (2) 設問文の文末に「でしよう」が用いられる文型
「なんばんめでしよう」、「ねずみはなんびきになるでしよう」、「あわせて、なんびきでしよう」、「きいろい

はなは32ほんよりなんぼんおおいでしょう」の例のように、「でしょう」が用いられていることが特徴的である。普通の日本語なら、「なんぼんめですか」、「ねずみはなんびきになりますか」、「あわせて、なんびきですか」、「きいろいはなは32ほんよりなんぼんおおいですか」と、終助詞「か」を用いた疑問文になるところである。

また、この表現に関連して、設問文の文末に「のでしょうか」が用いられることも指摘できる。「にいさんはなんまいもっているのでしょうか。」「えみさんはおはじきをなんこ買ったのでしょうか。」「ののでしょうか」が用いられている設問も見いだされる。「どうぶつむらにどんぐりが7こはいったふくろがおちていました。だれがおとしたのでしょうか。」

(3) 条件を表す「Vと」を用いる文型

「はとが6わいます。2わとんでいくと、のこりはなんぼでしょう。」「7わいました。2わとんでくると、なんばになるでしょう。」のように、接続助詞「と」を用いる条件文が第1学年から使用されている。構造シラバスによる日本語教育で導入される文型としては、入門・初級ではまだ出てこないものである。

(4) 節が名詞を修飾している文型

「□にあう数をかきましょう。」「56ばんから60ばんまでのばんごうをつけたこどもたちがスケートをしています。ころんでいるのはなんぼんのこどもでしょうか。」「こたえが13になるかあどに○をつけましょう。」等、連体修飾の働きをしている文型が設問文中に見られる。

「こたえが6になるところにいろをぬりましょう。」のような、節が「ところ」を修飾している、連体修飾構文も、ここに含めることが出来る。

(5) 「Vている」を用いる文型

「おとこのこが3にん、おんなのこが4人あそんでいます。みんなでなんにんいるでしょう。」「(進行)、「△のいろいろがなんまいでできているでしょう。」「(状態)、「まだ火がついているろうそくはなんぼんでしょう。」「(結果の状態)のように、意味解釈が異なる「Vている」が見いだされる。

(6) 「Vてくる」、「Vていく」を用いる文型

「はとが6わいます。2わとんでくると、なんばになるでしょう。」「7わいました。2わとんでいくと、のこりはなんぼでしょう。」

(7) さまざまな、比較を表す文型

「うさぎはくまよりなんびきおおいでしょう。」「おおいほうに○をつけましょう。」「いちばんながいへびはどれかな。」

(8) 授受動詞「あげる」、「もらう」を用いる文型

「おはじきが15こありました。いもうとに5こおとうとに3こあげました。あわせてなんこになるでしょう。」「どんぐりを7こひろいました。9こもらいました。ぜんぶでなんこになるでしょう。」

(9) 理由を表す「ので」を用いる文型

「いれもののおおきさがちがうので、このままではくらべることができない。」

(10) 可能を表す、「Vことができる／できない」を用いる文型

「いれもののおおきさがちがうので、このままではくらべることができない。」

(11) 疑問詞、「何(＋助数詞)」、「どちら」、「どんな」を用いる文型

「のこりはなんばでしょう。」「ふうせんが14こあります。9にんに1こずつあげると、なんこのこるでしょう。」「どちらがながいでしょう。」「どんなかぞえかたをしましたか。」

出てきた助数詞は次の通りである。

「人」：おとこのこ、おんなのこ、こども

「こ」：けえき、いちご、たまご、あめ、おはじき、どんぐり、みかん、こま、ふうせん

「匹」：ねずみ、うさぎ、くま、りす(ウサギは「羽」で数えるので、気になるところである。)

「羽」：はと、すずめ、ひよこ

「枚」：いろがみ、いろいろた、きって

「本」：ほう、ろうそく、はな、ばなな

(12) 接続詞「そこへ」、「また」を用いる文型

「ねずみが13びきあそんでいました。そこへ3びききました。ぜんぶでなんびきになったでしょう。」「あめが13こありました。3こたべました。また5こたべました。なんこになったでしょう。」

(13) 「**のは疑問詞でしょうか。」のように、準体助詞の「の」を用いる文型

「ころんでいるのはなんぼんのこどもでしょうか。」

「なんぼんのこどもがころんでいますか。」と表現できるものである。

(14) 「Vやすい」という文型

「なんこずつかぞえると、かぞえやすいかな」

(15) 「A そう」のように、伝聞の「そう」を用いる文型

「あかいはなが32ほんあります。きいろいはなはそれより4ほんおおいそうです。きいろいはなは32ほんよりなんぼんおおいでしょう。」

(16) 算数科特有の表現

「しきにかきましょう。」「かずをもとめます。」

3.2 第2学年で初出の文型

- (1) 設問の文末に「Vなさい」を用いる文型
「くだもの数を○をつかって、グラフにかきなさい。」
第2学年になって、「Vましょう」ではなく、「Vなさい」が使用されるようになることが指摘できる。
- (2) 「Aれば/Vれば」を用いる文型
「こたえがただしければ○, まちがっていれば正しいこたえをかきなさい。」「1こ何円のおかしにすれば, みんなで720円になりますか。」「なん円はらえばよいですか。」
ここでは、形容詞「よい」の使い方も、気になる。漢字表記なら、気にならないところだが、話しことばでは、普通「いい」と言っているものである。書き言葉であるから、「よい」で正しいということだが、2学年の児童にとって、文体の差という認識があるのだろうか。まして、外国人児童の場合は、教師からの説明がなければ理解しがたいものである。
- (3) 「たら」を用いる「Vたら, Vました。」という文型
「かきが28こありました。となりになんこあげたら, 16このこりました。なんこあげましたか。」
- (4) 「Vたらよい」を用いる文型
「○には+と-のどちらを入れたらよいでしょうか。」
- (5) 動詞の「可能形」を用いる文型
「ジュースが1本に2 dl ずつはいっています。ジュースはなん dl のいくつぶんといえますか。」
- (6) 手段を表す、「Vて」を用いる文型
「ひごとねん土玉をつかって, はこをつくります。ねん土玉はいくついますか。」
- (7) 比況(比喩, 例示)を表す「よう」を用いる, 「* *のようなN」という文型
「下のようなはこの形についてこたえなさい。」
- (8) 「Vように」を用いる文型
「こたえのたしかめのしきになるように, □にある数をかきなさい。」
- (9) 時にかかわる, 「~から~まで」, 「まえ」, 「あと」を用いる文型
「午後3時から午後3時15分までの時間はなん分ですか。」「午後7時25分の1時間あとはなん時なん分ですか。」「午前8時から30分まえの時こくはなん時なん分ですか。」
- (10) 「Vてみる」を用いる文型
「みのまわりから, かわったとけいやおもしろいとけいをさがしてみましよう。」
- (11) 「て形」接続を用いる文型
「バスに20人のっています。えきで7人おりて, 5人のってきました。いまなん人のっていますか。」

- (12) 「Vである」を用いる文型
「ずのようにまるいテーブルにりんごがおいであります。おなじ数になるように二人で分けるには, 'あ', 'い', 'う'のどの線でわけるとよいでしょうか。」
- (13) 不定のものをさす, 副助詞「か」を用いる文型
「みかんが35こありました。なんこかたべたので, のこりが17こになりました。なんこたべましたか。」
- (14) 「Vこと」という, 命令を表す文型
「ひろいじゅんによんでいくこと。」
- (15) 目的を表す, 「Vのに」を用いる文型
「花山えきからかちかち山までいくのに, それぞれの電車ではなん分かかりますか。」

3.3 第3学年で初出の文型

- (1) 時を表す副詞節「Nのとき」, 「Vたとき」を用いる文型
「イの長さが6 cm のとき, ウの長さは何 cm ですか。」「本を毎日7ページずつ読んでいます。何日かたったとき, 42ページまで読んでいました。読んだのは何日間ですか。」
- (2) 「Vてから」を用いる文型
「青の長さをもとめてから, 黄の長さをもとめなさい。」
- (3) 「意向形」を用いる文型
「円に3本の直線を引いて, いくつかに分けようと思います。」
- (4) 「連用中止」で文をつなぐ文型
「どんなときに答えが9になり, 63や45になるかを考えてみましょう。」
- (5) 目的を表す, 「Vのに」を用いる文型
「花飾りを1つつくるのに, リボンが1 m20cm あります。6つつくるのに, リボンはぜんぶで何 m 何 cm ありますか。」
- (6) 「Vたら, Nでした」という文型
「同じねだんのえんぴつを5本買ったなら, ぜんぶで250円でした。」
この文型は第2学年で初出の「Vたら, Vでした。」にまとめることもできる。
- (7) 「N1をN2として」を用いる文型
「えんぴつ1本のねだんを□円として, かけ算の式にかきなさい。」
- (8) 「Vたところ」を用いる文型
「次の図は, どのような計算をしたところですか。」
- (9) 「何というN」
「何という三角形ができますか。」
- (10) 「Vてもらう」を用いる文型
「1こ60円のパンを, 1ふくろに3こずついれてもらいました。2ふくろ買うと, 何円になりますか。」

3.4 第4学年で初出の文型

- (1) 終助詞「か」を用いる、「VかをVます」という文型
「えん筆は全部で何本あるかをもとめる式をかきなさい。」、「高さ50cmの台に立つと、何cmの高さになるかをもとめます。」
- (2) 「Vように」を用いる文型
「同じように、どの辺の合計も10になるように、1から6までの数字を1こずつならべましょう。」
- (3) 「Vなくても」を用いる文型
「たし算をしなくても、できる方法はないかな？」
- (4) 推量を表す、「そう」を用いる文型
「たし算をしなくても、かんたんに計算できそうですね。」
- (5) 形式名詞「はず」を用いる文型。
「240円の絵筆を買って、60円残るはずでしたが、別の絵筆を買ったので、20円しか残りませんでした。何円の絵筆を買いましたか。」
- (6) 「Vにつれて」を用いる文型
「1分、2分、3分、...とたつにつれて、水かさは、どのように変わっていくかを表にかきなさい。」
- (7) 「Vまで」を用いる文型
「わりきれるまで計算しなさい。」

3.5 第5学年で初出の文型

- (1) 「Vたことになる」という文型。
「1日平均何人欠席したことになりますか。」

3.6 第6学年で初出の文型

- (1) 「**という」を用いる文型。
「このような変り方をする2つの量の関係をなんといえますか。」
- (2) 「Vたとする」を用いる文型。
「どちらも、10個ずつ買ったとして代金を求め、それから1個ずつ個数を変えていきます。」
- (3) 「場合」を用いる文型。
「子ども会でおかしを配るのに、1人分80円のおかしにした場合と、1人分60円にした場合とでは、費用が480円ちがうそうです。人数が1人ふえるごとに、費用のちがいは何円ずつふえますか。」

3.7 算数科のテストに表れた、算数科で用いられる特有の概念を表す語彙と考えられるもの

- 1年生：たしざん、ひきざん、しき、けいさん、こたえ、かず、すうじ
2年生：グラフ、長さ、かさ、直線、筆算、三角形、

直角、長方形、直角三角形、点、辺、かけ算、ほうがんし、九九、九九の表、たんい

3年生：わり算、円、球、半径、直径、万、位、暗算、ぼうグラフ、あまり、二等辺三角形、正三角形、角、分数、等号、不等号、小数、数直線、重さ

4年生：兆、億、頂点、商、四捨五入、がい算、切り捨て、切り上げ、折れ線グラフ、和、平行、垂直、台形、平行四辺形、ひし形、対角線、面積、真分数、帯分数、数直線、立方体、面、直方体、てん開図、見取り図、「上から*けたのがい数」「**の位までのがい数」

5年生：積、余り、見積もる、整数、けた数、体積、公式、うちのり、容積、合同、対角線、偶数、奇数、倍数、公倍数、公約数、約数、最小公倍数、最大公約数、約分、通分、底辺、合計、こ数、平均、割合、百分率、歩合、小数、帯グラフ、売上高、定員、正多角形、円周、おうぎ形

6年生：線対称、交わる、点对称、対称の軸、逆数、比、比の値、拡大図、縮図、比例、反比例、角柱、円柱、角すい、円すい、表面積、側面積、底面積、円グラフ、柱状グラフ、以上、未満

4. 第3章から分かること

第3章において、算数科のテストを理解するために必要な文型は「51」を数えた。第1学年において「15」、第2学年において「15」、第3学年では「10」、第4学年で「7」、第5学年で「1」、第6学年で「3」の初出の文型が見いだされた。このことから低学年のうちに学習すべき文型が多いことが指摘できる。

次に、算数のテストに見られる特徴的な文型について考察する。第1学年では、設問文の文末に「Vましょう」、「Nでしょう」、「のでしょう」を用いる文型が用いられている。しかし、寺尾（同上）において第1学年では文末表現の「ましょう」、「のですか」の使用が指摘されているので、「Vましょう」の使用を算数科だけの特徴とすることはできない。指摘できることは、それらの使用により、年齢の低い、幼い児童に優しく語りかけるような問いの文になっているということである。このことは、第2学年からは「Vなさい」という命令表現の使用が始まっていることから分かる。条件を表す「Vと」を用いる文型、及びさまざまな比較を表す文型が第1学年から出てくるということは、算数という教科の特徴と言える。

「たしざん」、「ひきざん」も教授する算数科において、「何+助数詞」が用いられるのは当然であるが、「のこりはなんこでしょう」と「なんこのこるでしょう」の二通りの設問形式が何の説明もなく、同様の環境で出現す

るのは言語教育としては疑問を抱かざるを得ない。同様のことが、いわゆる準体助詞の「の」を用いる文型についても指摘できる。第3章の例によると、「ころんでいるのはなんばんのこどもでしょうか。」であり、「なんばんのこどもがころんでいますか。」ではないということである。国語科のテストでも見られたところから、言語使用環境に変化がないとすれば、教科に関わらず「設問文によく用いられる文型」として取り出して教授する必要があると言える。

「Vと」を用いる文型である、「7わいました。2わとんでくると、なんばになるでしょう。」という設問文については、別の疑問を提出したい。この設問では、初めにその場にいた鳩がそのままそこにいることが前提となっている。つまり、7羽いた鳩は逃げることなくそこに居続けると仮定することが正解を得ることの前提である。現実社会では、そのことはなんら保証されないのだが、算数という架空の社会ではそう認識することが要求されているのである。頭の良い子ほど混乱する可能性がある。このことは、外国人児童だけでなく、日本語を母語とする児童にとっても、簡単ではないのではないか。節が名詞を修飾する文型が第1学年から用いられていることも指摘しておきたい。

第2学年では、「たら」、「れば」を用いる条件文が出てきているが、従来の成人向けの日本語教育では、入門・初級レベルでは扱われなかったものである。第3章で具体的にみたように、児童が理解すべき文型は多く、それも低学年での負担が大きい。しかも、「たら」、「れば」を用いる文型だけでなく、シラバス項目として難易度が高く、従来の、構造シラバスにのっとった教材なら初級段階を終えてから学習する項目が低学年から出てきているのである。それらについての日本語指導が行われなければ外国人児童の負担は大きく、算数の理解がたやすすくないことが予測できる。もちろん当然のことながら、単に文型の理解だけがテストでの正解を保障するわけではないことは明らかである。語彙の理解、各語の表す概念の理解の問題が存在するのである。この点が、国語科との大きな違いである。

5. 結論

- (1) テストに用いられる特有の文型が存在する。
- (2) 国語科における設問と比べ、より多くの文型が算数科のテストの設問中に見られる。
- (3) 構造シラバスにのっとった教材での日本語指導では、国語科のテスト同様、算数科のテスト理解のための文型を効率良く学ぶことはできない。
- (4) 入国外国人児童の在籍学年が何学年であっても、低

学年で表れる文型から指導する必要がある。

(5) 算数科では、語彙指導も文型指導同様に重要である。

以上のことが算数科のテスト教材に表れる日本語の表現を文型という視点でまとめ分析した結果明らかになった。日本語指導が教科指導の橋渡しとなれるためには、文型導入の際に、算数科における設問を用いることが必要であると主張したい。

おわりに

効果的な日本語指導のためには、算数で用いられる文型を積極的に教えていくことが日本語指導担当者にとって必要であるとの結論を導きだした。しかし、視点を変え、算数を教えながら、日本語も教えていくと考えることができるのだろうかという疑問が湧いてきた。この場合、すべての教員が日本語指導ができるようになることが前提になる。これは、今後の課題としたい。

日本語指導を行う教師にとって、ふさわしい教材がまず必要であろう。近年、児童を対象とする市販の日本語教科書も徐々に増えてきているが、教科指導まで視野に入れたものは、筆者の見た限りでは、『ひろこさんのほんご』、『日本語を学ぼう3』、『日本語学級2』くらいだといえる。それぞれの教材の分析は今回扱えなかった。それも、今後の課題としたい。

現実問題としては、日本語指導担当者が日本語教育専門家とは限らず、また、指導法自体が確立しているわけでもない。日本語指導担当でない教員にも日本語教育の知識と経験があれば現場の状況も改善されると期待するところである。

参考文献

- 池上摩希子 (1998) 「教科に結びつく初期日本語指導の試み—教材『文型算数』を用いた実践例報告—」『日本語教育97号』日本語教育学会
- 伊東祐郎 (1999) 「外国人児童生徒に対する日本語教育の現状と課題」『日本語教育100号』日本語教育学会
- 岩沢正子他 (1994) 『「算数」の教科学習を助ける日本語テキスト試案』『日本語教育83号』日本教育学会
- 文部省 (1993, 初版1992) 『にほんごをまなぼう』ぎょうせい
- (1994, 初版1992) 『にほんごをまなぼう 教師用指導書』ぎょうせい
- (1993) 『日本語を学ぼう2』ぎょうせい
- (1994) 『日本語を学ぼう2 教師用指導書』ぎょうせい
- (1996, 初版1995) 『日本語を学ぼう3』ぎょうせい

- うせい
 —— (1995) 『日本語を学ぼう3 教師用指導書』
 ぎょうせい
 根元牧他 (1986) 『ひろこさんのたのしいにほんご』
 凡人社
 —— (1995) 『ひろこさんのたのしいにほんご2』
 凡人社
 西原鈴子 (1996) 「外国人児童生徒のための日本語教育
 のあり方」『日本語学』2月号 vol.15
 縫部義憲 (1999) 「学校教育における日本語教育」『日
 本語教育の交差点で』今田茂子先生退官記念論文集刊
 行委員会編 溪水社
 岡崎敏雄 (1995) 「年少者言語教育研究の再構成」『日本
 語教育86号』日本語教育学会
 大蔵守久 (1998) 『日本語学級1』 凡人社
 —— (1999) 『日本語学級2』 凡人社
 寺尾裕子 (1999) 「小学校における日本語指導の問題点
 について」『日本語の地平線』吉田弥寿夫先生古希記
 念論文集編集委員会編 くろしお出版
 東京外国語大学留学生日本語教育センター編 (1998)
 『外国人児童生徒のための日本語指導第1分冊・第2
 分冊』 ぎょうせい
 矢崎満夫 (1998) 「外国人児童に対する教科学習支援の
 ための日本語教育のあり方—算数文章題におけるスト
 ラテジー運用の考察から—」『日本語教育99号』日本
 語教育学会
 注1：V, A, Nという記号の使い方は原文の通り。
 (2000.7.31 受稿, 2000.8.31 受理)